横領された声を代弁することとその声が横領すること
――カヴェル哲学における声の理論の限界と挑戦

槇野 沙央理

1. はじめに

『理性の要求：ウィトゲンシュタイン・懐疑論・道徳性そして悲劇』（1979）（以下、『理性の要求』と呼ぶ）をはじめとする S. カヴェルのテクストは、示唆に富んだものとして、ウィトゲンシュタイン研究者を中心に広く読まれてきた[17]。特に、後期ウィトゲンシュタイン解釈において研究者が行うことを前期ウィトゲンシュタイン解釈においても行う、C. ダイアモンド、J. コナント、そして A. クレイリーらニューウィトゲンシュタイン派[18]の試みにより、カヴェルのウィトゲンシュタイン研究者に対する強い影響力は確固たるものとなったように思われる。

しかしながら、多くのウィトゲンシュタイン研究者にとって、カヴェルのテクストから自分たちの知識となるものを取り出すことは容易ではない。カヴェルのライティングの手法は哲学のアカデミズムの作法に即しておらず、それがどのようなものであり、またカヴェルのどのような考えに基づいて形成されたものであるのかということから問題になるからである。実際のところ、この問題がハードルとなって、カヴェルのテクストが、そこから私たちの知識となるものを取り出すことができる起源としてではなく、ウィトゲンシュタイン解釈の流派[19]を分断するものの象徴として扱われるようになってしまったように見える。

本稿は、このような事態を少しでも変えるべく、カヴェルのテクストから私たちの知識となるものを取り出すために役立つ一つのモデルを提示することにある。そのモデルとは、『哲学の＜声＞：自伝的訓練』[20]（1994）（以下、『哲学の＜声＞』と呼ぶ）に含まれる文をヒントに構成されるものであり、哲学の語りの営みの中に「自伝的な次元」（PoP p. 10）を見出していく視点だけではなく、同時に、自伝的な語りの営みの中に「哲学的な次元」（PoP p. 11）をも見出していく視点によって形成される。本稿は最終的に、このモデルが、カヴェルの考察を整理するために役立つだけではなく、カヴェルのウィトゲンシュタイン論の限界を見極めたうえでその挑戦が何であったかを明示的にするためにも役立つことを示したいと思う。

以下の節では、次の順で考察を展開していく。2 節では、カヴェルのテクストを検討するきっかけとして、カヴェル哲学が、その考察がもたらす成果に限界を設けるような仕方で「声の

---

[17] カヴェルのテクストは、ウィトゲンシュタイン研究者だけではなく、美学者や文学者らの関心をも集めている。このことは、カヴェルを専門とするジャーナル *Conversations: The Journal of Cavellian Studies* において、「カヴェルにおける、あるいはカヴェル以降の政治の美学と美学の政治」（vol.5）、「カヴェルと文学」（vol.4）といった特集が組まれていることから伺える。

[18] クレイリーとリードによる論文集『ニューウィトゲンシュタイン』（2000）を参照のこと。

[19] ウィトゲンシュタイン研究にはいくつかの流派がある。中でも、ニューウィトゲンシュタイン派に分類される研究者は、カヴェルの前提や語り口を全面的に受け入れる傾向にあるのに対し、標準的解釈と呼ばれる P.M.S.ハッカーの議論は、カヴェルの解釈を基本的に無視して成立している。もちろん、すべてのウィトゲンシュタイン研究がこのようであるわけではなく、ムルホール（1990, 2001, 2007）やクーセラ（2008）のように、標準的解釈と、ニューウィトゲンシュタイン派のカヴェルやダイアモンドらの解釈の双方を踏まえた研究も提示されている。

[20] 邦訳のタイトルは『哲学の＜声＞：デリダのオースティン批判論駁』とされているが、原文は *A Pitch of Philosophy: Autobiographical Exercises* であるため、このように訳した。

理論」とでも呼ぶべき思考システムを実装している理由はなぜなのかという問題提起を行う。次に 3 節では、この問題に回答するための道具立てとして、カヴェルの『哲学の声』から互いに対照しつつ共存する二つの視点を取り出し、これを用いて 4 節では、カヴェルの『理性の要求』における「規準と懐疑論」の節を吟味していく。私たちの吟味は具体的に次のような経路をたどる。カヴェルの語りは、弱者である懐疑論者の声を代弁し強者である哲学の声を失墜させるという仕方で、二つの声の間の分断を深めるように見えるが（4.1 節）、カヴェルの考察が進むにつれ、懐疑論者の声と哲学の声との関係が変容し、両者の明確な区別が薄れてゆき、最終的に、カヴェルは二つの声が分裂する以前のプリミティブな地点へと回帰することによって問題自体の捉え直しをはかる（4.2 節）。このような順序で本稿は、カヴェルのテクストを吟味するモデルを自分たちで形成し運用することによって、カヴェル哲学の思考システムである「声の理論」の限界が何を可能にしているかに回答することを目指す。

2. カヴェル哲学の声の理論とその限界

カヴェルの哲学には、ある特徴的な思考のシステムがある。それは、公に発せられる類の声は、私的・個人的な類の声の抑圧を通じて発せられるものであるという言語観にもとづき、この二つの声を聴き分ける過程を通じて、私たちが多様な営みの中で言葉を操ることで何をやっているか[21]を明るみに出そうとする思考システムである。公に発せられる類の声とは、「哲学の声」・「教師の声」などであり、「われわれ We」の声と呼ばれる。一方で、私的・個人的な類の声は、「懐疑論者の声」・「子どもの声」などであり、「私 I」の声と呼ばれる（cf. Gould 2013）。

このように聴覚的な表現によって言い表されるカヴェルの思考システムを、ここでは「声の理論」と呼ぶことにしよう。カヴェルはこの声の理論を実装することにより、自分自身の考察にある限界を課しているように思われる。その限界とは、二つの声のうち一方に重み付けがあることで、他方の声を活用する可能性を手放していることである。

まず、声の理論を実装するカヴェルは、一つの声の中に、沈黙させられ、沈黙していたことにさせられる私的な声と、私的な声の奪取（カヴェル流に言えば「横領 arrogation」[22]）によって成り立つ公の声という二つの声を聴きとる。その上でカヴェルは、横領され、沈黙させられてきた声を引き受け、語り出す。これにより、人が言葉を使ってものを語るという行為が私的な声の横領によって営まれてきたということを甘受しつつも、まさにその横領があること

[21] 私たちが多様な営みの中で言葉を操ることで何をやっているかという問題は、言うまでもなく、J. オースティンからカヴェルが引き継いだ問題意識である。だがこの問題意識を引き継ぐに際しカヴェルは、ウィトゲンシュタインの「言語とそれが織り込まれた諸活動の総体」（PU §7）を見てとるという発想を経由しているように見える。ウィトゲンシュタインを経由してオースティンを引き継ぐということは、哲学史的には逆行しているものの、オースティンがカヴェルに与えた影響を重視するならば、この順序で考えることが適当であるように思われる。

[22] カヴェルのテクストの注意深い読者であれば、カヴェルの「横領」という表現が、筆者の用いる「抑圧」や「奪取」という表現とはニュアンスが異なるものであることに気づくだろう。カヴェルの「横領」という表現には、声の起源が私的な側にあるということを踏まえつつ、横領する側の公的な側をも声の帰属先として認めるような含意がある。それゆえ、「抑圧」という表現では、声が横取りされるニュアンスを出すことができず、また、「奪取」という表現では、声の起源があくまで私的な側にあるというニュアンスを出すことができないという意味で、筆者の表現はミスリーディングなものに見えるかもしれない。しかしながら、一般的に、ある哲学者の専門用語を理解しやすくするために、ニュアンスは異なるが関連した表現を用いることは許されるだろう。それどころか、カヴェルが哲学とは何かということを精神分析との比較を通じて語っている（cf. PoP pp. 4-5）ことを鑑みれば、カヴェルの思考システムを敷衍する際に「抑圧」という精神分析的な用語を用いることは有利でさえあると思われる。

によって私的な声の存在を確信してきたかのように、公の声の地下を流れる私的な（カヴェル流に言えば「自叙伝的な autobiographical」）語りの水脈を守ろうとするのである。

このような哲学のスタイルにおいて、公に発せられる類の声よりも、私的な類の声の方に重点があることは明らかである。もちろん、カヴェルは私たちが「万人を代表して speaks for all」（PoP p. 10）語ることを非難するわけではない。カヴェルの考察において、私たち一人一人が（まさにこの文がそうであるように）個人でありながらも一人称複数形で語ること、「代表性 representativeness」をもつことは、人間の「能力 ability」（PoP p. 59）とされており、この能力についての否定的な判断は下されていない。だがカヴェルの考察は、代表的な語りの背後で沈黙していたことにさせられた声に、カヴェル自身の声を通して語りの機会を与えるものであり、私的な声の側にカヴェルの考察の成果がもたらされる構造になっていることには疑いがない。

このような、カヴェル哲学のアイデンティティと言える私的な声への重み付けは、カヴェルの考察からある種の自由を奪うと思われる。その自由とは、複数の声を活用する自由であり、複数の声を活用するためにオープンマインドでいる状態である。このことは、個々の声の個性を無視することではなく、いかなる声に対しても、その声を聴くことが私たちにどんな吟味の機会を与えてくれるかについて固着した見方をもたないということである。この自由の概念を踏まえてカヴェルの考察を見直してみるならば、それは、私的な声の側に成果がもたらされるような構造を取ろうとはしても、私的な声とともに西洋哲学史を構成してきた公の類の声に対してフィードバックがあるような構造を取ろうとはしないと言える。この構造的特徴は、私的な声と公の類の声の関係を固定するものであり、公の類の声を活用するということについて限定したことしか期待しないということを意味する。

カヴェルが手放した、複数の視点を活用するという自由は、カヴェルの考察の限界となる。この限界は例えば、ウィトゲンシュタインを読む際の限界として現れるだろう。今カヴェルのウィトゲンシュタイン理解を一旦留保し、別の（筆者の）読みを提示させてほしい。私たちは、ウィトゲンシュタインの『哲学探究』（以下、『探究』と呼ぶ）を、言語習得の訓練を経て自在に言葉を用いることのできるマチュアな（教師や建築家の）視点と、最低限の能力しか与えられていない（子どもや助手の）プリミティブな視点を立て、プリミティブな視点を取ることによっていかに私たちのマチュアな視点が様々な前提を取ることによって成立しているかを明るみに出すものとして読むことができる。この読みは、プリミティブな視点を用いてできることの探索を行うことであると同時に、その探索の成果を視点の明晰化としてマチュアな視点へとフィードバックすることでもあり、カヴェルの考察のような構造的な偏りはもっていない。このような筆者の読みと対比させるならば、カヴェルの声の理論は、複数の視点を活用する自由を手放すことにより、ウィトゲンシュタインのテクストが含む視点を十全に活用できないという限界を抱えるだけではなく、結果としてウィトゲンシュタイン哲学を矮小化するという危険を犯しかねないものと映る。

カヴェル哲学のアイデンティティと言える私的な声への重み付けの中に、私的な声に対してのみ成果が結実するというカヴェルの考察の構造的特徴の中に、カヴェルの声の理論の限界がある。だがもしかするとカヴェルは、この限界をあえて負うことで、この限界を無視してもよいと思わせるようなことに挑戦するのかもしれない。言い換えるなら、二つの声の関係を固定し一方にしかフィードバックを与えることができないという構造的な制約は、カヴェルの声の理論の足かせとなる一方で、同時に、カヴェルの切迫した動機に叶うような何か重要な実りをもたらすのかもしれない。次節では、このことを検討するにあたり、カヴェルのテクストを吟味するために用いるモデルを形成する。

3. 互いに対照しつつ共存する二つの視点

カヴェルが公の類の声に対する期待を最低限のものとし、それに対するフィードバックの道をあえて整備しないことにより、得ていたものは何だろうか。この問題を検討するために、（またそれによってカヴェルのテクストから私たちの知識となるものを得るという本稿の目的を遂行するために、）ここではカヴェルのテクストを吟味するための読解モデルを準備することにする。その読解モデルとは、哲学の語りの営みの中にある「自伝的な次元」を見出していくだけではなく、自伝的な語りの営みの中にある「哲学的な次元」をも見出していく視点によって形成される。

これら二つの次元をみる視点は、『哲学の＜声＞』（1994）において、カヴェルが語ったことから取り出せる。

> 哲学が人間を代表して語る、万物を代表して語る権利を主張するのが、哲学の自伝的な次元である。このため哲学は必然的に尊大となる。人間とは代弁するものであり、いわば模倣するものであるというのが、自伝の哲学的な次元である。（PoP p. 10-11）

この文章に含まれる、カヴェル哲学を象徴する二つの表現に着目しよう。それは、「代表」という表現と、「自伝」という表現である。

まず、カヴェル哲学において「代表」ということは、単純に言えば、一個人にすぎない「私」が、「われわれ」というより大きな主語を使ってものを語り「われわれを代弁する speak for us」（PoP p. 9）ということである。この代表性の概念は、言語を習得した私たち人間一般の能力とみなされている。つまり、カヴェル哲学における代表性の概念は、人間の普遍的な条件である。しかしながら、この代表性という能力を抱えてどのように生きるかという点に関しては、振る舞い方に個性が認められる。カヴェルに従えば、哲学は代表性の概念を振りかざし「権威」（PoP p. 9）的な振る舞いをする。これはいわば、哲学の声が、自分たちに万物を代表して語る正当な権利があるのだということを主張するような仕方でものを語るということである。一方で、カヴェル自身は、「代表性をもちながら生きようとするならば、人は同時に自らの有限性を注視しなければならず、自分を超えるものを銘記しなければならない」（PoP p. 12）と述べており、代表性の能力の乱用によって尊大になるまいとする。

次に、「自伝」という表現に着目しよう。カヴェル哲学において自伝とは、自身の遍歴を語ることであり、もっと言えば、自分にとって重要だと思われる要素（出来事や血縁関係や自身の身体的特徴）を結び合せることによって、自身の来歴を創造することである。『哲学の＜声＞』第 1 章「哲学と＜声＞の横領」においてカヴェルは、才能に恵まれた音楽家であることをアイデンティティとする母と、ユダヤ人であることとアメリカ人であることを結びつけようとする父について語りながら、自身の来歴を、絶対音感の欠如からくる音楽家としての挫折があったことや、ゴールドシュタインという名字を改名することを通じて（アメリカ生まれの彼が）過剰にアメリカ人になろうとする努力をしたこととして、語り紡いでいく。このようにカヴェルは、自分と両親、両親と自分とを重ね合わせ、自身のあり方を一つのモデルとして両親に投影しその結果を今度は自身の来歴として編集する手法を通じて、青年カヴェルが両親のアイデンティティを模倣し・模倣し損ねた過程を描いてみせる。

これら「代表」と「自伝」という表現は、一見すると、それぞれが対照的な事柄を取り扱う言い回しであるように見えるかもしれない。つまり、哲学が万物を代表して語るという尊大な

営みと、個人が来歴を創造するというささやかな営みとは、全く接点がないように見えるかもしれない。しかし、カヴェルは「哲学と自伝のあいだには内的な関連があり、両者は互いが互いを測る尺度になっているという直観」（PoP p. vii）に従い、両者を互いの相互理解に役立てようとする。

このカヴェルの直観に従って考えるならば、先の「哲学が人間を代表して語る、万物を代表して語る権利を主張するのが、哲学の自伝的な次元である。このため哲学は必然的に尊大となる」という文が示すのは、次のようなことであるだろう。すなわち、哲学が尊大な仕方で語ってしまうということそれ自体が、哲学の自伝なのである、と。この理解に従えば、「哲学の自伝的な次元」を見出すこととは、私たちが、尊大な「語調（tone）」（PoP p. 3）で行われる哲学の語りの中に、哲学が哲学たろうとする自伝的な声を聴きとることになる。

また、「人間とは代弁するものであり、いわば模倣するものであるというのが、自伝の哲学的な次元である」という文が示すのは、唯一無二の一人の人間という究極の有限性を生きる存在が、代表性の能力により、来歴を紡ぐ自伝的な営みの中で、他者の声を模倣し他者の声を自分のものにすり替えてしまう、ということであるだろう。この理解に従えば、「自伝の哲学的な次元」を見出すこととは、私たちが、ひっそりと行われる自伝の語りが他者の声の模倣という強者と同じような振る舞いによって営まれているということを見てとることになる。

この「哲学の自伝的な次元」と「自伝の哲学的な次元」という二つの表現を並置することで、表現と表現の間で相互の捉え直しが生じ、それぞれの表現は相互の個性を映し出しつつも独自性を増していく。私たちは、この二つの表現間での相互・往還作用を見てとる視点、すなわち、個々の表現と、表現同士での相互の捉え直しとを見てとる大きな視点を活用し、カヴェルのテクストを吟味していきたい。つまり、カヴェルのテクストから取り出した視点を読解モデルとして見立てることにより、カヴェルの思考システムを豊かにして（声の理論の限界を補って）いきたいのである。

このことは、たとえある特定の年代に書かれたテクストというものを認めるとしても、そのテクストから取り出した視点を、自分たちの読解モデルとして自由に用いていきたい、という宣言を行うことでもある。この宣言とこれに即した検討を行うことは、カヴェルを自分たちの知識にするという本稿の目的を叶える手段であるだけではなく、それ自体が目的でもある。この宣言を理解してもらうために、筆者は次のような注意を与えておきたい。もし私たちが先の宣言をするとしても、このことは、自分たちの読解モデルの元となった『哲学の＜声＞』というテクストの時代的性質を無視してよいとみなすことではない。テクストの時代的性質とは例えば、『哲学の＜声＞』が、1992 年にヘブライ大学において行われたエルサレム–ハーバード講義をもとにして、1994 年に出版されたテクストであるということである。また、本稿が次節で吟味しようとする対象のテクストが、カヴェルの博士論文をもとに 1979 年に出版された『理性の要求』であるということである。つまり本稿は、最低でも 20 年以上後に書かれたテクストを利用して、古いテクストを吟味しようとしているということをはっきり言っておこう。このことが意味するのは、カヴェルが『理性の要求』を執筆した時点でどのような心理状態にあったかについて関心をもたないということである。この条件の上で、カヴェルのテクストをあくまでそこから自由に知識を引き出してよいものとして扱い、さらに、私たちの読みによってそのテクストをこれまでにない仕方で浮かび上がらせるという仕方で、そのテクストがもつ知識を更新していきたい。

次節では、本節で得た「哲学の自伝的な次元」と「自伝の哲学的な次元」という個々の表現と、二つの表現同士での相互の捉え直しとを見てとる大きな視点を読解モデルとして活用し、カヴェルの『理性の要求』における「規準と懐疑論」を吟味していく。

4. 『理性の要求』1 章 2 節「規準と懐疑論」

4.1. マルコムの「規準」概念に対するカヴェルの態度

カヴェルの代表作の一つである『理性の要求』第 1 章は、ウィトゲンシュタイン論としてまとめられている。全 5 節に分かれるこの章の前半においてカヴェルは、社会における様々な判断基準（第 1 節）、他人が痛みを感じていると言うための規準（第 2 節）、あるものが何であるかを知りそれを同定するということを巡って提示されたオースティンによる必要条件（第 3 節）を取り上げ、横領される私的な声を肩代わりして語ることにより、これらの規準や必要条件が少数派の弱い声を排除することによって成立するものであることを告発していく。

本節では、カヴェルがしばしば肩代わりする私的な声として、懐疑論者の声が活用される第 2 節「規準と懐疑論」を取り上げる。ここでカヴェルは、ウィトゲンシュタインの私的言語論と呼ばれる箇所[23]をめぐって、マルコムとアルブリットンにより提示された、他人が痛みを感じていると言うための「規準 criterion/criteria」の概念を吟味する。その規準とは、うめき声をあげることや顔をゆがめることといった「痛みの振る舞い」である。マルコムによると、これらの規準は、科学的な観察によって発見される「徴候 symptom」とは異なる仕方で痛みの存在を確かなものにするという。

> あるものを y の徴候にするものとは、それが常にあるいはしばしば y に伴うものであるということを教える経験であり、かくかくのことが y の規準であるとは、経験ではなく「定義」の問題である。y の規準の充足は、y の存在を間違いなく（beyond question）確証する（establish）。y の徴候の発生もまた、y の存在を「間違いなく」確証する——しかし異なる意味で。脳の経過の観察は、ある人が痛みの中にあるということを確かにする（make it certain）だろう——しかし彼の痛みの振る舞いがそれを確かにするのと同じ仕方ではない。たとえ生理学が脳内の特定の出来事が身体的痛みに随伴するということを確証したとしても、ある人の脳に出来事が生じているにも関わらずその人は痛みの中にないということは起こりうる（つまり想定することは意味をなす）。しかし、もしある他人が痛みの中にあるというある規準が充足される場合に、その人が痛みの中にないと想定することはその規準をもつ人にとって意味をなさないだろう。（Malcom 1963, p. 113）

このようにマルコムは、「徴候」概念と対比あるいは連続させて「規準」概念を提示する。これに対するカヴェルの反応は、あくまで懐疑論者の声の存在を示そうと試みるものである。カヴェルは、マルコムの提示する「規準」概念が不十分なものであるということを検討していくが、そのポイントは、マルコムの「規準」概念が、結局のところ、何らかの仕方で（懐疑論者の声を聴かないで済むようにさせてくれるような）確実性の概念を確保しておこうとするものでしかない、ということを暴露することであるだろう。

カヴェルの反応を見ていこう。

> ［…］マルコムは適切にも、規準が、あるものがまさにその事例であるための論理的に必要かつ十分な条件を与えることによって、経験的な確実性を提供するという考えを許容し

[23] 例えばキャンドリッシュとウリスリー（2014）は、私的言語論の範囲を、『探究』の 244 節から 271 節を中心とする箇所（あるいは、関連ある 315 節まで）とみなしている。

続ける。規準は、徴候が行うのとは異なる「仕方」で何かを確証する、という言明によって満足させられる人は［…］誰もいないだろう。（CoR p. 38）

カヴェルは、マルコムの言説において規準の概念がもたらす確実性が、徴候の概念がもたらす確実性とほとんど区別されないのではないか、という疑念を呈している。もちろんマルコムは、規準と徴候がどのように異なる仕方で他人の痛みの存在を確証するかについて、生理学の例によって説明を与えてはいる。しかしカヴェルは、マルコムが与えた「規準」の概念では、懐疑論者を黙らせることはできないと言う。

だがこれが本当の問いに対する誠実な返答だ。もし規準が確実性を与えるもののつもりとされ、そしてこれが異なる現象の論理的含意でも、それに不可避的に随伴するものでもないものとして分節化されるならば、一体これはどんな種類の確実性なのか？（CoR pp. 38-9）

カヴェルは懐疑論者の声を代弁し、規準の概念が与えうる確実性が、徴候の概念が与えうる確実性とは決定的に異なるものでない点に疑問を呈している。ここで私たちが、カヴェル自身が懐疑論者の立場に立って、規準は、痛みと振る舞いの論理的な関係であるか、それに類する仕方で、痛みと振る舞いの関係を確実なものにするものでなければならないということを要求している、と考えるのは早合点であるだろう。むしろカヴェルの疑問文が抗議するのは、マルコムの言説が哲学の声として、つまり懐疑論者の声を抑圧するものとして働いてしまうということ、それが懐疑論者を満足させるどころか不満を高めてしまうということである。

「確実性」の丸損は防がれねばならぬ（must be hedged）、真実の知識は与えられるという考えは、偶然的であれ必然的であれ、「ほぼ」確証されうるだけであり、次の問いの圧力にさらされることを強いられる。だが、あなたが欲するすべての徴候（symptoms）や規準（criteria）が与えられれば、ただちに、ある人が実際には痛みを感じていないかもしれないということがありえないことになるのだろうか？ これに対する答えは、抵抗しがたく、「ありうる（Yes）」であるように思われる。（CoR p. 39）

カヴェルは、マルコム（やアルブリットン）が与えうる確実性の概念は、値引きされたものであり、「確実性ではなくだいたい確実性（near certainty）」（CoR p. 39）でしかないと述べる。このことは、マルコムの言説が、懐疑論者に向けられたものではなく、懐疑論者の声を無視することによって成り立とうとするプロフェッショナルな哲学者集団の代表として語られたものになってしまっている、という告発に等しい。

こうしたカヴェルの考察態度について、もし人が、カヴェルは懐疑論者の声に肩入れをし、哲学の声の権威をただ単に失墜ならしめようとしている、という視点のみを用いるとすれば以下のように映るであろう。カヴェルは、マルコムの提案に代わる代替案を提示したり、それを修正したりしようとはせず、ただ単にマルコムのアイディアを非難しているだけであり、悪く言えば挙げ足取りをしているだけである。マルコムは、何らかの仕方で懐疑に対する解決を行おうとしているのに、カヴェルは、ただ単に規準の概念に過度の要求を行うことによって、その試みを頓挫させようとしているではないか。

しかしながらカヴェルの語りが注意深く疑問文でなされている点に着目するならば、彼が

懐疑論者の声を代弁するのは、あくまで横領され都合よく切り取られた懐疑論者の声が存在するのだ、ということを示すため、つまり、マルコムの「規準」概念が、懐疑論者の声を無視する権利を主張するためのものとして働いてしまっている、ということを示すためであることがわかる。

そしてこのことは、カヴェルの考察において、まずは哲学の声と懐疑論者の声との間に分断が生じてしまっているということを明るみに出すという位置づけをもつ。この上でカヴェルは、分断された二つの声の壁を溶解させようとする。次節では、前節で準備した視点、すなわち哲学の自伝的な次元と自伝の哲学的な次元とを同時に見てとる視点を活用し、カヴェルの考察が、哲学の声と懐疑論者の声の間の分断を深めようとするものではなく、むしろその分断の自覚を開始地点として両者の間に交流を発生させようとするものであることを検討していく。

4.2. 横領し模倣しあう声と声

カヴェルが懐疑論者の声を代弁し、懐疑論者を黙らせようとして発せられる哲学の声に抵抗しようとするとき、弱き者の声を肩代わりしようとするはずのカヴェルの口調が、まるで哲学の専門家のように力強く響くことは、注目に値する。カヴェルの追求は、マルコムによる次の補足的説明に向けられる。

> 彼が痛みのうちにあることの規準を記述する命題は、「彼は痛みのうちにある」という命題を論理的に含意するだろうか？ ウィトゲンシュタインの回答は明らかに否定の方にある。規準はただ特定の環境においてのみ充足される。もし私たちが激烈な痛みの振る舞いを表す人に出くわしたら、彼が痛みのうちにないということを示すものはありえないのだろうか？ もちろんある。例えば、彼は演劇のリハーサルをしている、あるいは、彼は催眠術をかけられており、「君は痛みのうちにないにも関わらず、あたかも痛みのうちにあるかのように振る舞うだろう」と指示されている、[…] 等々。痛みの表現は特定の「環境」においてのみ痛みの規準であり、他の場合にはそうではない。(Malcolm 1963, pp. 113-4)

マルコムはここで、痛みの振る舞いが痛みの規準である、ということのさらなる条件にあたるもの（「環境」）を付け加えている。カヴェルは、このようなマルコムの補足を「譲歩（concession）」と呼び、これが「もし X の規準が満たされるならば、X はある場合でなければならず、かつ X はある場合である必要はない」という「明らかな矛盾」を意味すると述べる（CoR p. 41）。

> もし何ものかが、激烈な痛みを表すある人が実際には痛みのうちにないということを「示す」のだとすれば、このことは、もし彼が痛みのうちにあることの規準が満たされるならば、彼の痛みの存在は間違いなく確証される、というのも、私たちは「痛みの規準は充足されなかった」と言うべきだからである、という言明と矛盾しない。だがこれは空虚である。というのも、今私たちは、規準が満たされているという確実性や、それについての規準であるようなもの［痛み］がそこにあるという確実性を決して知らないという対価を払うことによってのみ、ある規準とそれについての規準であるようなもの［痛み］との結合の確実性を保存しうるからである。（CoR p. 41、［］内補足は引用者、以下同様。）

ここには、規準の（見せかけの）現存とその充足との間にむき出しの裂け目があり、それを通じて「論理的必然性」や「確実性」のようなものの供給が流出してしまっている。（CoR p. 41）

もし他人が痛みを感じているかどうかについて、痛みの振る舞いの有無という規準を与えたとしても、実際に痛みの振る舞いが生じた時に、必ずしもその規準が充足されたことになるとは限らないのであれば、それは、規準とその充足ということの間に何か別の条件が入り込むような裂け目を許すということであり、規準を充足するということの内実をほとんど任意の判断に任せているようなものである。また、そのような仕方でしか痛みの振る舞いという規準が他人の痛みの有無を教えてくれない以上、痛みの振る舞いが他人の痛みの有無の規準であると述べることが私たちにもたらしてくれる確実さの知識など、ほとんど役に立たないものである。マルコムが、痛みの振る舞いが痛みの規準であることの条件を追加したことで、規準とその充足という枠組み、また、そもそもある事柄が他人の痛みの有無の規準となるという枠組みが、崩壊し始める。そして、規準とその充足という根本的な枠組みが崩壊し始めるということは、マルコムの「規準」の概念が、懐疑論者にとって不満足なものであるだけではなく、哲学の声にとっても、要を得ないものとなっていることを示唆する。

ここにおいて、哲学の声と懐疑論者の声との間にある壁の溶解が始まる。これまでカヴェルは、懐疑論者の声を代弁し、マルコムの言説が、一見すると懐疑論に対して正面から応答するものであるかのように見せかけているものの、実は、懐疑論者を排除してできる「われわれ」の共同体を確立せんとして語られるものでしかなかった、ということを示してきた。カヴェルの訴えは、哲学の声の「われわれ」の中に懐疑論者が入っていないことに気づいてほしい、そして懐疑論者も「われわれ」の中に入る権利があるのではないか、ということであった。この辛抱強い訴えかけの結果として、マルコムの「規準」概念の不十分さを平等に被るような、哲学の声のみならず懐疑論者も含まれるような連帯が生まれたのである。

懐疑論者も含まれるような連帯は、はじめに哲学の声が語った「われわれ」の共同体ではない。二つの声が含まれるような連帯は、当初は「われわれ」の語りを持たなかったはずの懐疑論者の声が、カヴェルの強い語調を通じて、その語りを持つようになった結果生まれたものであると考えられる。

そのプロセスは以下のようなものである。カヴェルはあくまで懐疑論者の声に寄り添う。しかしながら、カヴェルの語りは、懐疑論者の声を代弁するものでありながら哲学の声の語調を帯びる。というのも、カヴェルによる、マルコムの「規準」概念に対する不満を代弁するそのやり方は、まさに哲学の専門家のものだからである。カヴェルは、後期ウィトゲンシュタイン哲学の知識をもつ専門家として、マルコムに対して意見を言う立場にある、という権利を主張している。カヴェルが懐疑論者という声の弱者の代弁者であるとしても、その手法は、強者のもの（哲学の声が使用する語調）と全く同じである。

カヴェルの語りが強者の語調をもつことで、私たちは、カヴェルの語りの中に、懐疑論者の声とは異質な声を聴きとるようになる。私たちが、カヴェルの語りが何の声を代弁しているのかを同定することは困難となる。マルコムの「規準」概念の不能が露呈するにつれ、哲学の声と懐疑論者の声との間で、それぞれのもつ語調は次第に交わり合っていく。そこでは、哲学の声が懐疑論者の声を借りて自己反省を始め、懐疑論者が哲学の声を模倣し自分たちが語る権利を主張し始める。いわば、哲学の声と懐疑論者の声は、互いに横領し模倣しあうのである。

カヴェルに代弁される懐疑論者の声とカヴェルに追及される哲学の声、という単純な二項

対立でテクストを読み進めることはできない。最終的に、カヴェルの語りは、哲学の声と懐疑論者の声との対立という構造を超えてくる。

> 何がこの規準［についてマルコムが譲歩によって行おうとしたこと］の失敗を説明するだろうか？ 私の提案は、何もしないだろう、というものになるだろう。というのも、説明することが何もないからである。ここには失敗などないのである。痛みの規準は痛みの振る舞い（特定の環境における特定の振る舞いとして私たちが取り扱い、決定し、受け入れ、採用するもの）の現存によって充足される。それならば、痛みそのものの存在、発生の規準はないのだろうか？ 私は「痛みそのもの」が何であるかを問うだろう。あるいはこう言うこともできる。ある振る舞いの、痛みの振る舞いであることの規準を本質的に超え出るものなど何もない。それでは、私たちはふだんどのようにして、他人が実際に痛みに苦しんでいるかどうかを知ることができるのだろうか？ もし私があの問いの出現に真に動機付けを行ったならば、今や私たちは「修辞的」と呼ばれるものではない最大の力を、何が私たちに自分たちが決して知ることがないだろうと考えさせるのか？という問いに与えようと望むだろう。これはすなわち、私たちはそのような点において、そうした人間の知識に対する私たちの失望の探求へと、その根源を明るみに出そうとすることへと動かされるだろう、ということである。（CoR p. 44）

この箇所のカヴェルの語りは、マルコムの「規準」概念の不能を批判するものではなく、懐疑論者の声を代弁して哲学の声に対抗しようとするものでもない。カヴェルは、私たちが現に日常の生活で特定の環境において特定の振る舞いを痛みの規準として取り扱ってしまっているという観点、言うなれば、懐疑論者の問いやその問いを横領しようとする哲学の声が発生する以前のよりプリミティブな地点[24]へと回帰している。この地点においては、そもそもなぜ私たちが、他人が痛みを感じているかどうかについて確実な知識を持ちえないと考えてしまうのか、何がそう考えさせているのかが問題となる。

このプリミティブな地点は、懐疑論者の声と哲学の声との対立が生成する以前の地点だと考えられる。というのも、そもそもなぜ私たちが、他人が痛みを感じているかどうかについて確実な知識を持ちえないと考えてしまうのか、何がそう考えさせているのかが問題となる地点では、懐疑論者の問いが生じる前提が問題となっており、それゆえ、懐疑論者の声と哲学の声とが対立するきっかけ（問い）がまだないからである。（このことから二つの声は、同じ動機のもと異なる方向へ分裂したものだと言うこともできる。）

カヴェルの考察は、きっかけとしては、哲学の声と懐疑論者の声との対比を活用してはいたが、カヴェルが懐疑論者の声を肩代わりし哲学の声の尊大さを、すなわち、懐疑論者を締め出すことによって可能となる概念を自分たちのものとして語ってしまっていたということを暴露する過程で、哲学の声と懐疑論者の声との関係を変容させ、最終的には、両者の分断を深めるのではなく、むしろ、両者の声が対立する以前のプリミティブな地点への回帰を遂げた。カヴェルの考察には、二つの声が対比しあい模倣しあうという相互作用を捉えるより大きな視点が準備されていたのである。

5. カヴェルがもたらしたこと

[24] このプリミティブな地点は、カヴェルが「中立性（neutrality）」（PoP p. 35）ということで考えていることに等しいと思われる。この詳しい考察は、今後の課題としたい。

カヴェルは、懐疑論者の声を、初めは自身の存在が無視されていることに対する抗議として代弁し、次に、哲学の声の語調を奪いながら代弁し、実は双方の声が互いの能力について通じ合っているということをデモンストレーションする過程で、懐疑論者の声と哲学の声とが互いに独立なものではないことを示し、最終的に、両者が哲学の営みへと駆り立てられる場合がどのような場合であるかを教えてくれるプリミティブな地点へと辿り着く。

以上のように、哲学の自伝的次元と自伝の哲学的次元という、互いに対照しつつ共存する二つの視点を通じて『理性の要求』の「規準と懐疑論」を吟味するならば、このテクストは、二つの声の分断からその分断が生じる以前の地点への回帰に挑戦していたと言うことができる。このことは、カヴェルの考察が、カヴェルが偏重する私的な声である懐疑論者の声を、次の仕方で私たちの知識として汲み取ることを可能にしている。私たちは、懐疑論者の声を、共同体に対する脅威として排除するのではなく、むしろ、どのような仕方で私たちが確実性に対する失望を覚え、日常性から離れていってしまうのかを思い出させてくれる存在として、私たちの探求の一部として受け入れることができる。つまり懐疑論者の声は、私たちの探求の中で、日常的な言語使用のあり方を捉えなおすために有用な視点として位置づけられる。

もし懐疑論者の声を、日常的な言語使用のあり方を捉えなおすために有用な視点として役立てるとすれば、私たちは、自分たちの確実性の体系を熟知することができると期待される。というのも、懐疑論者の声（と哲学の声の邂逅）は次のような知識を与えてくれるからである。私たちの確実性の体系は、特定の振る舞いを他人の痛みが存在することの規準として立ち上がらせるような特定の環境を、言語の使い手が構成することによって成立しており、しかもこれが行為のレベルで成立している。この知識は、私たちの確実性の体系の大枠に匹敵するものである。この大枠に沿って考察を進め、どんな環境を構成してどんな言葉・振る舞い・図等々といった記号の意味を立ち上がらせるかを個別のケースに沿って（行為のレベルで）考えれば、私たちがどのような環境を構成しどのように記号の意味を確定するかが明らかとなり、結果的に、私たちが何をどのように確実だとみなしているかについての知識が得られると期待できる。

実際にこのようなことをカヴェルが実行していたか、そうではなく、プリミティブな地点へ回帰することをゴールにしていたかは、別の機会に検討すべき問題となる。今のところ筆者は、哲学の声に対して考察のフィードバックを行う構造がなければ、上記の計画を実行することは難しいと考えている。（反対に言えば、上記の計画を実行すれば、哲学の声に対して考察のフィードバックを行う構造が自然と生じるだろう。）というのも、懐疑論者の声を汲み取って確実性の体系を考察していくことは、プリミティブな地点から出発し、これまでの考察を辿り直すこと、つまり、懐疑論者の声だけではなく哲学の声のあり方をも捉えなおすことであるからである。しかしながらカヴェルは確かに、懐疑論者の声が、私たちにとって有用な視点であるということ、私たちの知識の一部であるということを示してくれたのである。

参考文献

Candlish, S., & Wrisley, G., 2014. “Private Language”. In: *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Edward, N., Zalta (ed.). URL = <https://plato.stanford.edu/archives/fall2014/entries/private-language/>.

Cavell, S., 1979. *The Claim of Reason*. Oxford: Oxford University Press.（本稿で引用の際は CoR と略記した。）

——, 1994. *A Pitch of Philosophy: Autobiographical Exercises*. Cambridge, Mass., USA: Harvard University Press.（引用には、中川雄一訳、『哲学の＜声＞：デリダのオースティン批判論駁』、春秋社、2008 年を使用し、PoP と略記した。なお、ページ数は原文のものである。）

Crary, A., & Read, R., 2000. *New Wittgenstein*. London: Routledge.

Gould, T., 2013. "Me, Myself and Us: Autobiography and Method in the Writing of Stanley Cavell". *Conversations* 1, pp. 4-18.

Kuusela, O., 2008. *Struggle against Dogmatism: Wittgenstein and the Concept of Philosophy*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Malcolm, N., 1963. "Wittgenstein's Philosophical Investigations". In: *Knowledge and Certainty*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall. pp. 96-129.

Mulhall, S., 1990. *On being in the world: Wittgenstein and Heidegger on Seeing Aspects*. London: Routledge.

——. 2001. *Inheritance and Originality: Wittgenstein, Heidegger, Kierkegaard*. Oxford: Oxford University Press.

——. 2007. *Wittgenstein's Private Language: Grammar, Nonsense, and Imagination in Philosophical investigations,§§243-315*. Oxford: Clarendon Press.